

2024年(R6) 6月10日

発行所 石井記念友愛園
〒884-0102
宮崎県児湯郡木城町大字椎木644番地1
☎0983-32-2025 E-mail yuuaisya@kijo.jp

「友愛の森について」柿原政一郎 様

園長 児嶋 草次郎

少し誇らしい気持ちで、天国の柿原政一郎先生にお手紙をさし上げています。

「友愛の森」事業がようやく完成に近づいています。石井記念明倫保育園と小規模児童養護施設「あきづきの家」との複合施設「友愛の森」の方は、工事も完了し、保育園は、6月1日2日で引っ越ししました。新しい園舎に職員も子供たちも、保護者の方々も喜んでおられます。「あきづきの家」の方は、7月1日よりスタートする予定です。職員が2人住み込んで、養護の子供たち6人と寝食を共にします。より家庭的な雰囲気の中で、子供たちは生活できるようになります。

複合のメリットとは何か。外から見たら24時間、365日、人のいる保育園に進化したということになります。子供と職員と一緒に生活する館ですので、3階部分は、保育園の職員が帰宅した後も、明々と電気がついており、夜も、事故やトラブルが発生した時は、対応できるようになります。どういうことを想定しているかと言いますと、以下の三つの場合が考えられます。

- ①宮崎県は、南海トラフ大地震がかなり高い確率で来ると言われています。その時の避難所になりたいと思います。それに対応するために4階部分を無理して作りました。昼間に災害が発生すれば保育園の職員が対応できますが、夜発生したら、「あきづきの家」の職員が対応します。
- ②石井記念友愛社は保育園を10か所経営していますが、何らかの支援を必要とする家庭も増えてきています。支援の意味も広く、その境もアイマイになって来ていると言ってもよいでしょう。経済的には自立していても、DVや虐待等で一時期家庭から逃げ出さねばならない場合もあるでしょう。そういう時の避難場所になるのです。4階部分には、ビジネスホテル（バス、トイレ付）並の個室が3室用意されています。
- ③過疎化・少子高齢化の中で、地域も疲弊し、独居高齢者も多くなって来ています。また、価値観が多様化する社会状況の中で、離婚も多くなって来ています。昔のように地域で共助する余裕もなくなって来ているというのが現実でしょう。誰がその穴埋めをするのか。公助にも限界があります。特に公務員は夜は無理です。我々社会福祉法人の出番だと思うのです。例えば台風の前、大雨の前など、地域の人たちが非常に不安な状況に追い込まれた時、一時的な避難場所になり得るのです。特に夜が大事です。

この「友愛の森」事業には、保育園、小規模児童養護施設だけではなく、障がい者通所施設もからみます。隣接する明治期の建物である「せいごろう亭」2棟を土地と一緒に購入し、茶臼原自然芸術館の高鍋事業所として活用することにしたのです。障がい者の方々活躍する場をもっと作りたいというのが第一ですが、もう一つは、城下町高鍋の文化復興です。「歴史と文教の町高鍋」と高鍋の人たちは言うのですが、その歴史と文教が生み出した文化的なものはほとんど何も残っていません。

まず機織りと染色を「せいごろう亭」でやるつもりです。カフェ・売店も開いて、障がい者の方々と地域の方々、子供たちとの交流を進めます。「友愛の森」とは、「日々善に遷（うつ）り、外扉を閉ざさず、道に遺（お）ちたるを拾わず」と、秋月種茂の理想郷に思いを馳せながら、災害時の「相救」・「相

助」の現代版具現化を進める意味ですが、石井十次流に言うならば、「互いに相信じ、相愛すべきこと」の実現を図ることなのです。

柿原政一郎先生、今、私は先生に向けてお手紙をさし上げていたのです。私は今、先生のお導きを強く実感しています。

石井十次の弟子であった先生が高鍋町長を引き受けられ、私費で図書館を建てられたのは、昭和28年、70歳の時でした。図書館は町に寄付されたわけですが、現在も末裔の方々に支援されながら、りっぱに存続しています。最近リニューアルされ、小さいながらも、耀きを取りもどしました。

昨年の夏頃から、「友愛の森」建設のため、このあたりを度々通るようになり、ようやく気付かされ、愕然（がくぜん）としました。今まで気付かなかったことを恥じました。なぜ先生は、あの場所に図書館を作られたのでしょうか。高鍋城の大手門を出てすぐ通りの左側です。その図書館の前から北に向けて家老屋敷通りが伸びています。参勤交代に出発する時、整列した所です。大手門通りは大手門からまず東に向かって伸びていて、江戸時代中央商店街であった六日町、十日町通りにぶつかると、敵の進行を遅らせるため道路を少し南にずらして、さらに東へと一直線に伸びています。これが江戸時代の町づくりの基本でしょう。重要なのは大手門通りです。ここから町づくりは始まるのです。

大手門のすぐ前に、町の頭脳とも言うべき図書館を作ろう。それから、高鍋のまちの戦後復興は始めよう。そういうお考えだったのだろう。私が気付かされたというのは、そこです。今まであの場所に図書館があることの意義については何も考えませんでした。

大手門通りを軸として町づくりを考える、そのような思想はその後、継承されませんでした。今は黒谷坂から駅に抜ける通りがメインストリートとなっています。

石井記念友愛社は、柿原先生のお導きで戦後この茶臼原で事業を再開していますが、高鍋の町とは縁がありませんでした。しかし、その後保育園を運営するようになり、次々と高鍋町内に縁ができていきます。石井記念明倫保育園を町立保育園の民間移譲で運営するようになったのは、平成18年です。明倫文化発祥の地と言ってもよいくらいに江戸時代の町の中心地にありましたので、町立南町保育所から明倫保育園と名前を変えました。それから18年になりますが、不思議なことに次々に周辺の土地が手に入るようになり、今回の事業へと発展しました。振り返るならば、これも明らかに柿原先生のお導きです。

茶臼原で岡山孤児院の再興をめざして再開した石井記念友愛社が、高鍋の歴史的にも重要な所に拠点を作って、柿原さんがやろうとした明倫文化の再興に関われるようになったのです。柿原先生が図書館を作られたのが昭和28年で、70年という年月がたっていますが、私としては、ようやくそれを引き継げるチャンスが訪れたという感じです。

やはり、基本軸は大手門通りです。これに従って、城下町高鍋町は復興していかねばならないでしょう。

私は、新設の「友愛の森」あたりには、中世の頃、お寺があったとイメージしています。高鍋が財部（たからべ）と言われていた時代、1220年前後、土持一族がこの地を支配するようになります。土持一族はもともと大分県宇佐神宮の神職だったとそうですが、日向の地に広がる荘園管理のために派遣され、延岡を中心に活動しながら豪族化していったようです。今、NHK大河ドラマで紫式部をやっていますが、同じ時代かもしれません。そして、平安時代末期頃には、日向の地全域を支配するようになり、「土持7頭」と呼ばれるようになったようです。その中の一つが財部土持です。財部土持は230年間ほど高鍋を支配しています。福岡から来た秋月が280年間ですから、長さから言ったらそんなに変わらないのです。

戦後80年ですから、230年間は長い。高鍋の城や町の基盤を作ったのは土持氏ではないかと、私は思

っています。ところがほとんど記録が残されていないのです。学者は記録のないことには触れない。だから高鍋の人たちは、秋月一族が高鍋の歴史を作ったかのごとく考えています。しかし、私はイメージをたくましくして、土持氏支配の時代からの高鍋の歴史・文化を想っています。

お城の大手門を作ったら、東に向けて、まずまっすぐに通りを作ることから町づくりは始まるでしょう。そして、次に作るのは、そのお城（一族）の鎮護と安泰を守るためのお寺でしょう。1200年前後、鎌倉幕府（1192）ができた頃ですが、弱肉強食の武家社会の混乱の中で様々な仏教宗派が誕生し、全国に広がっています。ちょうどその頃と財部土持一族が高鍋一体を支配した時とが重なるのです。上流階級の仏教も武家や民衆のための鎮魂や平安のための宗教へと生まれ変わっていったのです。

ここからは何の資料もないのに私の勝手な推察です。この「友愛の森」のあたりに、土持一族の菩提寺「太平寺」があったのではないか。その後西都の都於郡（とのこおり）を中心に勢力を拡大した伊東一族との争いに負けて財部土持は追い出される（1457年）のですが、その時「太平寺」も焼かれ、一族のお墓も現在の太平寺地区の山の中に捨てられたのではないのか。現在の保育園の北側にある「火産靈（ほむすび）神社」が、江戸時代に八坂神社から火の神様を分霊したもので、それ以前は不詳と記録に書いてあるのを知ってから、そのように想像するようになりました。江戸時代の絵地図を見ると、この部分は空地なのです。町の中心地であるのに、何か不幸なことがここであって、人々が忌避するようになったのではないか。

柿原先生、話がどんどん横道にそれているようにも感じるのですが、私にとっては、高鍋の町の魂の部分であり、無視できないのです。あの地で事業を始めるにあたって、建物を作ればそれでよいというものではなく、その地の歴史と魂もしっかりふまえておく必要があります。

はったりと笑われてもよいですから、私は柿原先生がなされたことの引き続きを、残された人生でやろうと思います。

- ①大手門通りから参道を遊歩道という形で再現させること。その道添いに桜や四季の花々を植えて、町の人々に散歩コースとして選ばれるようにすること。しかけも準備します。秋月種茂や三好善太夫の言葉を10枚くらいタイルに焼きつけて、立てた切石にはり付けていきます。石井十次の魂の基盤となった精神文化です。道の名前を「明倫の小道」とします。
- ②石井記念明倫保育園で、いわゆる明倫堂教育を行うこと。先ほども書きましたが、町立南町保育所を民間移譲でいただいた時に名前を変えています。明倫文化の中心地にありその歴史と文化を背負いたいと願ったからです。新築を機に、保育室の名前も次のように変えました。0歳児—うさぐみ組（宇佐組）、1歳児—たいへいぐみ（太平組）、2歳児—正直組（三好善太夫訓言）、3.4.5.才組—思いやり組（三好善太夫訓言）、相助組（郷閭学規）、賢才組（明倫堂記）、学童組—明倫組。

三つ子の魂百までじゃないですが、人間は生まれて小学校に入学するまでが一番大事です。石井十次が岡山から茶臼原に岡山孤児院を移した理由の大事なものが、大自然の中で子供たちを自由自在に遊ばしめて、感性を養うでした。一階の食堂兼ホールに、室内菜園を作り、バナナとパイナップルを植えました。また小さな池（噴水）も作り、スイレンを植えて茶臼原のメダカを入れました。さっそく子供たちは反応しています。

- ③この町出身の画家道北昭介氏の絵画の世界を顕彰していくことも、文化の復興につながると思っています。これは私の直感ですが、道北氏の絵のドロドロとした赤のエネルギーは、高鍋町の歴史の裏の部分を感じさせます。そのエネルギーがあつての文教の歴史なのです。石井十次もそのエネルギーに、少年時代翻弄されました。そのエネルギーはいずれ昇華して美しく結晶化し、人々を癒すようになるのですが、その一つの具現化が田中等君の彫刻の世界だと思っています。新しい建物にさっそく道北

氏の大作5点を展示しました。せいごろう亭の2階にも展示するつもりです。田中等彫刻公園を作るという夢もまだ捨てていません。

- ④大手門通りを歩いていて、もう一つ大きな発見をしています。高鍋農業高校の歴史的存在の重さと言ったようなものです。朝早く友愛の森に花植えに行っていると、大手門通りを自転車で“登城”する学生たちが門の中に吸いこまれて行く姿を見ることができます。その後姿は、美しいものです。かつて、石井十次少年も、歩いてではあったものの、このようにして藩校明倫堂に通ったわけです。

かつては知事や国会議員を輩出したこの高鍋農業高校こそが、明倫堂の魂を引き継いでいるのでしょう。友愛園にも農高生はいますが、高い矜持（きょうじ）を持って学び志を持ってほしいものです。寮も完備していることだし、全国からこの魂を引き継ぐために学生が集まって来てほしいものだと夢想しています。そうすることが町の再興につながると確信しています。石井記念明倫保育園の子供たちも、もっと農高生たちとの交流をしてほしいと思います。交流の中で互いの魂が呼びさまされていきます。

柿原政一郎先生、長くなりましたが、もう少しがんばらせて下さい。天国からの御支援をよろしくお願い致します。点が線になり線が面になる、そのような手法で進めていかねばならないのでしょうか。ありがとうございました。